

# 長坂道子 美しく、サステナブルに Sustainably Elegant

人権・環境意識の高いスイス在住の長坂さんは、リジェス・オプリージュの名づけ親でもあります。自身が選んだ上質なフェアトレード作品を通し、サステナブルな生き方とスピリットについて考えます。



ながさか・みちこ ●作家・ジャーナリスト。京都大学文学部哲学科卒業。25ans編集部に約3年在籍後、1988年渡仏。欧米数都市に住み、執筆及び医療・福祉のボランティア活動を続ける。主な著書に『フランス女』（マガジンハウス）、『世界一ぜいたくな子育て』（光文社新書）。2008年、スイスでハイエンド・フェアトレードのセレクトショップを起業。商品や情報の発信を通じ、サステナブルなショッピングスタイルを提案

創刊30周年OG特別寄稿

変化はこれから!

Sign of Change!

Photos: YUJI ONO

## バッグと女の特別な関係

### It

Bagという言葉がモード業界でしきりに用いられるようになってきたのはいつ頃からだったろうか。両手、両肩手ぶらでビジネスミューティングにも、女性との食事にも出かけられる男たちと違って、私たち女はバッグなしでは一歩も外に出られない。そんな私たちにとって、バッグというアイテムは、ある意味、服よりも髪型よりも香水よりも、ずっとずっと抜き差しならぬアイデンティティの一部だ。無数にあるブランドの無数にあるタイプから、あるバッグを能動的に選び取るという行為は、それがそのまま「私はこういう女だ」という意志表明。「It Bag」という表現には、そうした女たちの「自分探し」願望がぎゅつと濃縮されているのである。

さて、写真のバッグ——これを自分の次の「It Bag」として認定する人がいたとしよう。彼女は果たしてどんな動機、どんな思いでこのバッグを所有しようとするのか。最初にいってしまうと、これはリサイクルルから生まれた商品。もつというならば、



ブラジルから届いたブルトッパ・コレクションの中でもとりわけインパクトが強いのがこのトートバッグ。ヨーロッパの雑誌等でも大きく紹介されるなど、ファッション性も高く、人を振り向かせる強い個性の持ち主だ。ブラジルのスラム街の人にとって空き缶リサイクルは大切な生活の糧。その現場にイタリアからのデザイン力と技術指導もたらされ、華やかで夢のある商品が生まれた。495スイスフラン。\*1スイスフラン≒¥87(2009年12月現在) ●お問い合わせ「fairy tale select」info@fairytalesselect.com http://www.fairytalesselect.com/

これは空き缶のブルトッパから作られた商品。遠くブラジルで空き缶をリサイクルする人たちがいる。その人たちと偶然出会ったミラノ在住の女性がいる。空き缶を集めをする人々の置かれた、決して楽とはいえない状況。しかしその状況の中で、たくましくサバイバルする彼らのパワーに打たれたその女性は、そこで夢のプロジェクトを立ち上げる。スラム街の人たちに技術指導をし、リサイクル原料をもとに目の肥えた消費者を満足させるハイエンドでファッション性の高い商品を生み出すプロジェクト。それは生産者の彼らに収入の道を開くだけでなく、仕事への誇り、という「生きるに値する喜び」をも与える。

**対等な関係を二つ、また二つ  
世界のあちこちに築いていくこと**

しかし、そういった「説明的」「予備知識的」な事柄はバッグ選びという非理性的な行為においては、実をいえば二次的なこ

と。女はまず、第二にバッグに目惚れしなくてはいけない。ややこしい背景のストーリーよりも、まずは、バッグそのものが自分に向けて放ってくるオーラ、「私を所有して」という声ならぬ声にそそのかされて決意をするというのが、どう考えても自然な流れではないだろうか。そしてその非理性的な所有欲が、結果的に小さな小さな社会貢献につながっていたのだとしたら……。それこそが、消費における理想的で健全な順序というものではないだろうか。

仕事に誇りを持つ作り手たちは、買い手の同情とか哀れみよりも、敬意や惚れ込みといった気持ちをもっともっと嬉しく思うものだ。そこには施すものと施されるものとの上下の関係ではなく、作り手と消費者といった対等な関係が成立する。そういう対等な関係が、世界のあちこちに二つ、また二つと築かれること。それもまた、サステナブルという世界観が具体化していくための大切な道程だと私は思うのである。